

## 令和 5 年度（2023年度）新規研究課題

課題番号：R5-01

課題名：農林業産学公連携プラットフォームを活用した  
早生の酒米新品種の早期育成

研究期間：令和 5 年～令和 9 年（2023年～2027年）

研究担当：農業技術部土地利用作物研究室

## 1 研究の背景

山口県産日本酒は、出荷量、輸出量ともに増加傾向にあり、原料となる酒米の生産も増加している。本県で生産される主な酒米品種は「山田錦」と「西都の雫」であるが、いずれも収穫時期が10月上中旬の中生品種であり、収穫作業が特定の時期に集中する等の問題がある。このため、高品質な酒米の生産拡大に向け、作期分散が可能となる早い熟期の品種が必要となっている。

また、県酒造組合からは、日本酒の需要が高まる11～12月に新米で仕込んだ酒が提供可能となる、現行品種に比べて収穫時期が早い酒米品種が求められている。

## 2 目的

「コシヒカリ」～「日本晴」熟期で、農業形質及び酒造適性ともに優れる系統を育成する。

## 3 研究内容

酒造適性に優れる「山田錦」及び「西都の雫」等を交配親とし、DNAマーカー選抜等の最新の育種技術を活用し、早期に早生熟期で栽培特性の優れる系統を選抜する。併せて、酒造適性についても確認し、酒造適性に優れる酒米新系統を育成する。

## 4 研究のポイント

- ・最新の育種技術を活用することで、迅速に酒米新品種を育成することができる。
- ・育成段階から関係機関と連携して酒造適性を確認することで、効率的な選抜・育成ができる。
- ・新たな酒米品種を活用することで、酒米生産を含めた県産日本酒の起爆剤となることが期待される。

# 農林業産学公連携プラットフォームを活用した 早生の酒米新品種の早期育成

研究期間：令和5年～9年  
担当：土地利用作物研究室

## 背景

- ・ 山口県産日本酒の出荷量、輸出量が増加
- ・ 原料の酒米も生産量増加しているが、既存の酒米品種は収穫期が10月上中旬の中生品種が太宗を占める

・ 作期分散が可能となる9月上中旬収穫の早生熟期の酒米が求められている

・ 日本酒需要の高まる年末年始に新米で仕込んだ酒が提供できる

早生の酒米品種が必要

## 研究内容

- ・ **最新の育種技術を活用**し、早期に新品種を育成
- ・ **育成段階から関係機関と連携して酒造適性を調査**し、効率的に選抜・育成



山口県産日本酒のさらなる発展の起爆剤に！